



つい先日、平尾誠二さん（元ラグビー日本代表監督）から、「理不尽に勝つ」というタイトルの新書を贈呈頂きました。既に読まれた方もおられるかと思いますが、良書ですので、是非読まれることをお勧め致します。

その中で平尾さんは、「そもそも、この世の中は決して公平でも公正でもない、フェアではないのだ。必ずしも理屈が通らないどころか通らないのがむしろ普通だ。世の中というものは、もともと理不尽なものなのだ。なぜなら、世の中をつくらしているのが、もともと矛盾に満ちた人間であるからだ。」と書いておられます。人間は生まれながらにして姿、形、能力が同じではない。且つ、恵まれた環境に生まれる人もいれば、ハンディを背負って生まれてくる人もいて、そういう意味でも人間は理不尽を背負って生まれてくるものだ。であれば、その理不尽に不満を言ったり、嘆いたりするのではなく理不尽に打ち克つ考え方、生き方をすべきで、理不尽は人を鍛える強いエネルギーを出させるとも書いてあります。読み進めながら、大変共感、共鳴出来る本でした。

そうした視点で世の中を見れば、日本だけでなく世界中が、また、過去においても、未来においても、矛盾に満ちた人間が織り成す人間社会は永遠に理不尽なことが常にどこにでも有ると思うべきで、他人を批判したり世の中を嘆くより、自分自身の考え方と視点を変えて、自ら信じる道を貫徹してゆけば良いのではないのでしょうか。

坂本龍馬は、
「世の人は我をなんとも云わば云え
我が成すことは我のみぞ知る」
という言葉を残しましたし、
山岡鉄舟も、
「晴れてよし曇りもよし富士の山
もとの姿は変わらざりけり」
と言っています。
そして、新渡戸稲造は、
「見る人の心ごころにまかせおきて
高嶺に澄める秋の夜の月」
と言っています。

いずれも、無責任な世俗の人達の評価など気にするな、自分の事は自分しか解らないのだから、信じた道を歩いてゆけば良いという自戒の言葉であった訳です。

最近のネット社会は、名前も名乗らない発信者が、実態の無いうわさや誹謗中傷を無責任に瞬時にして世界へ発信してしまう陰湿な社会をも作ってしまいました。

そうした時代においても、我々は一度きりの自分の人生を、周りにおもねる事なく、自分の信念を貫いてゆく生き方をしたいものです。そして、そうした人達が、少しでも増えてゆけば、それぞれの「道」を通して、周りに良い影響を及ぼしてゆく社会へとなってゆくのではないのでしょうか。

互いに「理不尽に勝つ」人間になりたいものですね。